第40回写真の町東川賞 受賞者決定!!

第40回写真の町東川賞の受賞作家が決まりました。国内作家賞は石川真生氏（沖縄県在住）、新人作家賞は金川晋吾氏（東京都在住）、特別作家賞は北海道101集団撮影行動、飛弾野数右衛門賞は北井一夫氏（千葉県在住）、海外作家賞はヴァサンタ・ヨガナンタン氏（フランス・マルセイユ在住）が受賞しました。

授賞式は8月3日㈯に改善センターで開き、同日から文化ギャラリーで受賞作家作品展を開催。翌4日㈰には同所で受賞作家フォーラムも開催予定です。

【講評】

第40回写真の町東川賞審査会は、今年2月21日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞57名、新人作家賞64名、特別作家賞24名、飛弾野数右衛門賞51名、海外作家賞13名。

国内作家賞は、沖縄を拠点に精力的な制作活動を続ける石川真生氏に決定した。初期からの主要な作品をはじめ、2014（平成26）年から取り組んでいる『大琉球写真絵巻』シリーズの新作を中心に展示された東京オペラシティ アートギャラリーでの展覧会は、被写体との信頼関係を育みつつ展開される創作写真の独創性を照らし出すものでもあった。初期から現在にいたるまで、石川氏の写真表現に一貫しているのは、展覧会タイトルにもなっている「私に何ができるか」という明確な問いである。こうした独創性と一貫性の稀有（けう）な在りようが大きく評価された。

新人作家賞は、金川晋吾、菅実花、鈴木のぞみ、田口和奈、西野壮平、吉田志穂の各氏に絞り込まれた後、最終段階で金川晋吾、菅実花、西野壮平の各氏が残り、最終的に金川晋吾氏が選ばれた。失踪を繰り返す父親や20年以上消息不明だった伯母と、写真や文章で細やかに関わっていく金川氏の作品は、従来的な見る／見られる関係、撮る／撮られる関係を静かに揺さぶるものでもある。いっそう深みを増しつつあるその問いかけと、そこから生まれる写真表現の新たな可能性が決め手となったといえよう。

特別作家賞には、北海道101集団撮影行動が選ばれた。北海道101集団撮影行動とは、全日本学生写真連盟が1968（昭和43）年から77年の間に行った、のべ600人以上ともいわれる大学生たちが参加した匿名的な活動である。写真集にも展覧会にもまとまらず未完のままになっていたが、近年、写真や資料の収集、保管が進んでいることから、今回の受賞となった。特別作家賞の規定には「北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家」とある。ここで自明となっている作家とは、はたしてどのような存在なのか。北海道101集団撮影行動の受賞は、半世紀を隔て、この問いを現在に投げかけることにもなるに違いない。

飛弾野数右衛門賞は、北井一夫氏に決定した。村や町など普通の人々の暮らしと日常の風景を撮り続けてきた北井氏の展開は、「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け」た仕事を対象とした同賞の規定にぴったりと合致するものである。1983（昭和58）年から1987（同62）年にかけて撮影された『フナバシストーリー』の、撮影された地である船橋市での展示は、北井氏の写真がかけがえのない船橋市民の記録と記憶となっていることを浮かび上がらせるものでもあった。これは同賞のもうひとつの規定、「地域に対する貢献」を示してあまりあるものだろう。

海外作家賞は、菊田樹子氏の調査に基づいた丁寧な説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のフランスから、ヴァサンタ・ヨガナンタン氏が選ばれた。ヨガナンタン氏は、古代インドの大長編叙事詩『ラーマーヤナ』を現代的に再話、各章ごとに1冊ずつ写真集化する長期プロジェクト『A Myth of Two Souls』を展開している。写真だけでなく、イラストレーション、インドの伝統的な着色、土地固有のイメージなどを織り交ぜた表現が高く評価された。

2020（令和2）年の審査会後に深刻化していったコロナ禍も一区切りつき、ようやく例年どおりに戻った今年の審査会は、くしくも40回目の節目となる審査会となった。40年という年月は歴史と伝統という言葉で呼ぶに十分な長さだと思うが、その歴史と伝統は、絶えざる革新によって育まれてきたものでもある。さらなる発展に向けて、東川賞はどう革新していくべきか。今年の審査には、多かれ少なかれそのような思いが反映しているように思う。1985（昭和60）年の「写真の町宣言」から、2014（平成26）年の「写真文化首都宣言」を経て現在に至るまで、その趣旨に共感した町の人々の多大な努力と、世界の人々の共感の力に導かれながら、新たな一歩を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員
上野 修

【受賞者紹介】

〈国内作家賞〉
石川 真生 氏

〈受賞理由〉
展覧会「石川真生 ―私に何ができるか―」（東京オペラシティ アートギャラリー／2023）に対して

1953（昭和28）年、沖縄県大宜味村生まれ。1970年代から写真をはじめ、1974（同49）年、WORKSHOP写真学校東松照明教室で写真を学ぶ。以降、沖縄を拠点に制作活動を行い、沖縄をめぐる人物を中心に人々に密着した作品を制作している。90年代までの主な写真展に、1977（同52）年「金武の女たち」（ミノルタフォトスペース／東京）、1989（平成元）年「フィリピン」、1990（同2）年「港町エレジー」（いずれも那覇市民ギャラリー／沖縄）、1991（同3）年「仲田幸子一行物語」（りうぼうホール／沖縄）。2000年代には国内外の企画展に参加。主なものに2003（同15）年「KEEP IN TOUCH: POSITIONS IN JAPANESE PHOTOGRAPHY」（グラーツ市美術館／オーストリア）、2004（同16）年「ノンセクト・ラディカル　現代の写真Ⅲ」（横浜美術館／神奈川）、同年「永続する瞬間 ― 沖縄と韓国内なる光景」（MoMA PS1／アメリカ）、2008（同20）年「沖縄プリズム　1872-2008」（東京国立近代美術館／東京）がある。

2011（同23）年、『FENCES, OKINAWA』で、さがみはら写真賞を受賞。2014（同26）年に写真展「大琉球写真絵巻パート1」（那覇市民ギャラリー）を開催以降、毎年、本シリーズの制作発表を続けている。2019（令和元）年、日本写真家協会賞作家賞を受賞。その後も精力的に活動を展開し、2021（同3）年、「石川真生展：醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。」（沖縄県立博物館・美術館／沖縄）、2023（同5）年「石川真生―私に何ができるか―」（東京オペラシティアートギャラリー／東京）を開催。2024（同6）年、第74回芸術選奨文部科学大臣賞、第43回土門拳賞を受賞。釜山ビエンナーレ2024（韓国）、「ライフ2 すべては君の未来」（熊本市現代美術館／熊本）に参加予定。

主な作品に、「金武の女たち」（1977）、「熱き日々 in キャンプハンセン !!」（1982）、「LIFE IN PHILLY」（1987）、「フィリピン」（1989）、「港町エレジー」（1990）、「仲田幸子一行物語」（1991）、「沖縄の米軍」（1996）、「沖縄海上ヘリ基地」（1998）、「日の丸を視る目」（1999）、「大琉球写真絵巻パート1～10」（2014-2023）がある。現在も国内外で広く写真を発表し、沖縄県立博物館・美術館のほか、東京都写真美術館、福岡アジア美術館、横浜美術館、国立国際美術館、ヒューストン美術館（アメリカ）、メトロポリタン美術館（アメリカ）など、パブリックコレクションにも多数収蔵されている。

▲沖縄芝居―仲田幸子一行物語
仲田幸子（1933-）劇団でいご座座長。三枚目が当たり役、1978年頃

▲沖縄芝居―仲田幸子一行物語
南風原町（津嘉山公民館）、1981年6月

〈作家の言葉〉
第40回写真の町東川賞を授与させていただき誠に有難うございました。50年余りの間、沖縄を拠点にして、沖縄をとり続けてきた私にとっては励みになる賞です。これからも沖縄をとり続けていきますので、よろしくお願い申し上げます。

〈新人作家賞〉
金川 晋吾 氏

〈受賞理由〉
写真集『長い間』（ナナルイ／2023）、写文集『いなくなっていない父』（晶文社／2023）に対して

1981（昭和56）年京都府生まれ。大学在学中にインターメディウム研究所に通い、写真家の鈴木理策のワークショップを受ける。写真を撮り始めたころは、写真によって生じる「切断」の機能、いわば「よくわからなくする」写真のありようにひかれ、対象やテーマなどは設定せずにスナップ写真を撮る。2000（平成12）年に入学した大学を2年休学し6年目の2006（同18）年に写真「ひとつぼ」展に入選。就職活動はやったがうまくいかなかったので、コンペ入選をなんとなくの言い訳にフリーターになり、アルバイトをしながら写真を撮るようになる。だが、次第に自分の写真がパターン化しているように感じ、これまでのいわば「無意味」を志向するような方向性では続けられなくなる。将来への不安に駆られ胃腸も悪くする。環境を変えようと2008（同20）年東京藝術大学の大学院を受験し、進学できることに。ただ、それでも何を撮ればいいの

かわからずに迷走しているとき、父が数年ぶりにいなくなる。父はしばらくして戻ってきたが何もせずに家にいるようになる。このことを機に、これまではやらなかったことをやってみようと思い、父を撮り始める。父と関わるなかで起こったことや感じたことを日記につけるようになる。父を撮ることで、写真には思いのほかさまざまなものが写ってくることを実感し、写真と出会い直す。2016（同28）年に青幻舎より『father』刊行。『father』という作品によって父が「失踪する父」として固定されていくことへの反動として、失踪ばかりしているわけではない父のことや自分のこと、写真のことについて書いた『いなくなっていない父』を2023（令和5）年晶文社より刊行。今では言葉を書くことが自身の活動にとって欠くことのできないものになっている。

2010（平成22）年より病院で暮らしている伯母の身元引受人になり、たまに会いに行って写真を撮るようになる。2020（令和2）年に伯母が亡くなるまでの写真と日記で構成された『長い間』を2023（同5）年ナナルイより刊行。父や伯母についての日記を書くなかで日記というメディアへの関心が高まり、日記に関するワークショップのファシリテーターをおこなうようになる。

現在は、長崎の平和祈念像やカトリックの文化、自身の信仰等々について扱った『祈り／長崎』を制作中で、書肆九十九より刊行予定。また、複数人で暮らしている自身の生活を撮影した作品も制作中で、こちらも出版に向けて編集作業を進めている。

▲father ,2009

▲father ,2009

〈作家の言葉〉

このたびは東川写真新人賞をいただき誠にありがとうございます。写真に撮られることを受け入れてくれた父と伯母に深く感謝したいです。

『father』を出版する前、話をするために父に会いに行きました。自分のことが主題となっている本が世に出ることについて、父の気持ちを聞いておきたかったからです。

父は「お前が本にしたいならそうしたらいい」と言ってくれました。その反応は予想通りだったのですが、私が本当に聞きたかったのは「私の思いどうこうはさておき、あなた自身はこの作品のことをどう思っているのか」ということでした。ただ、私がいくら聞き方を変えて尋ねても、父の答えは「お前がしたいならしたらいい」以上のものではありませんでした。

父はそのとき次のようなことも言いました。

「お前がやっていることが何なのかを理解しているわけではない。でもだからと言って、お前がやっていることにどうこう言いたいとは思わない」

このような私と父の関係がよいものだと言いたいわけではありません。むしろあやうさをはらんでいるとも言えると思います。ただ、このような関係のなかで父が私に自分自身を差し出してくれたからこそ、『father』のような作品が生まれました。

写真という場において自身の存在を私に差し出してくれた父と伯母に、今回の受賞をささげたいです。

・・・

き起こった。その中で「写真で何ができるか?」を自らに問うた学生たちによる写真運動を全日が開始した。「北海道101集団撮影行動」はその一つである。1968（昭和43）年に開催された「写真100年 日本人による写真表現の歴史」展での、田本研造らによる北海道開拓初期写真群の優れたドキュメンタリー性に触発されたことが契機となり、北海道の現実に写真で、そして集団で向き合おうとした。

合宿形式をとり、1977（同52）年夏までの9年間に全道各地で19回の撮影を行った。全国から延べ600人を超える学生が参集し、撮影された写真は膨大な数に上る。写真集出版を目指すも未完である。

〈作家の言葉〉

「北海道101集団撮影行動」の写真は、2013（平成25）年に東京都写真美術館で開催された「日本写真の1968」展にて、同美術館専門調査員で写真史家の金子隆一氏（「北海道101」初動メンバーの一人、立正大）が一部を紹介して以来、公開されることはありませんでした。このたび出展する写真はそのときの展示枚数をはるかに超えますが、それでもまだ全てではありません。

また、今回の東川賞受賞を機に、かつてのメンバーの一人で、田本研造らが遺したオリジナルプリントを68年当時、函館市博物館などで丹念に複写していた故澤田彰さん（旭川市出身、酪農学園大）の貴重なフィルムを、ご家族のご好意により展示に加えることができたことは大きな喜びとなりました。

集団での撮影行動は1977（昭和52）年で中断しましたが、出版を目指す私たちにとっては今も「北海道101」は続いています。

〈飛弾野数右衛門賞〉

北井 一夫 氏

〈受賞理由〉

展覧会「フナバシ ストーリー」（船橋市民ギャラリー／2023）に対して

1944（昭和19）年、旧満州鞍山（あんざん）市生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。

65年に、アメリカの原子力潜水艦が横須賀に寄港することに反対する全学連のデモ活動を撮り下ろした写真集『抵抗』を自費出版する。69年から、新東京国際空港反対闘争を記録した「三里塚」を『アサヒグラフ』に連載。闘争に身を置く農民たちの日々を内側から捉えた作品は高い評価を獲得し、72年に第22回日本写真協会新人賞を受賞。74年から『アサヒカメラ』に「村へ」を連載。同作で76年に第1回木村伊兵衛写真賞を受賞した。81年に大阪の庶民生活を取材した『新世界物語』、89年に東京のベッドタウンとして発展した千葉県船橋市で生活する人々を文章と写真でつづった『フナバシ ストーリー』を刊行。2012（平成24）年には、東京都写真美術館で回顧展「いつか見た風景」が開催された。2013（同25）年に60年代からの制作活動に対して日本写真協会賞作家賞を、2017（同29）年にはParis Photo 2017 Guest of Honor for Paris Photo by Karl Lagerfeld, J.P Morgan Curator's Highlightsを受賞した。

▲団地と新興住宅地に暮らす人々、撮影年代1983-1987年「フナバシ ストーリー」より

主なパブリック・コレクションに、船橋市役所（船橋市）、東京都写真美術館（東京）、宮城県立美術館（仙台）、東京国立近代美術館（東京）、シカゴ美術館（アメリカ）、ヒューストン美術館（アメリカ）、Pier 24 Photography（アメリカ）、サンフランシスコ近代美術館（アメリカ）、JPMorgan Chase Art Collectionなど。

〈作家の言葉〉

写真を撮りはじめてからもう60年になる。1964（昭和39）年20歳のときから写真を撮り、70年には「アサヒグラフ」などの週刊誌に掲載されるようになった。日本の70年前後は雑誌全盛の時代で、あらゆるジャンルの雑誌が競争して出版し、カメラ雑誌、グラビア写真雑誌も多数あった。そういう時代に写真家になって、ずっと撮り続けていた私の写真は、古くから続く村の人々の生活とその場の風景であり、それはどれも雑誌掲載のための写真だった。

雑誌のための写真は忙しいもので、撮影してすぐにフィルム現像、プリントをして翌朝にはできたばかりの写真を届けることがよくあった。思い返すと、いままでよくやってこれたという気がします。

この度は飛弾野数右衛門さんから「ご苦労さん」と言われたような受賞でとてもうれしいです。ありがとうございました。

〈海外作家賞〉

ヴァサンタ・ヨガナンタン 氏

〈受賞理由〉
長期プロジェクト「A Myth of Two Souls」における一連の作品に対して

1985年、フランス人の母とスリランカ人の父のもと、グルノーブル（フランス）に生まれる。ヨガナンタンは独学で写真を学び、最初の長期プロジェクトによる作品「Piémanson」（2009-2013）を制作する中で、優れた写真は時間の経過と結びついていることに気づいた。新しいプロジェクトは常に直感から始まり、時が経つにつれて自分が何をどのように撮りたいのかを理解するという。

2014年に出版社Chose Communeを共同設立し、『Piémanson』を刊行した。その後、インドの壮大な叙事詩『ラーマーヤナ』に触発され、現実と虚構の狭間を探求する7冊に及ぶ写真集のプロジェクト「A Myth of Two Souls」（2013-2021）に取り組んだ。

「A Myth of Two Souls」は、エリゼ美術館（ローザンヌ／2019）、シャネル・ネクサス・ホール（東京／2019）、Deck（シンガポール／2020）、ベルファスト・フォト・フェスティバル（2023）で個展として開催。また、「Illuminating India 1857-2017」サイエンス・ミュージアム（ロンドン／2017）、「Body Building」イシャラ・アート・ファウンデーション（ドバイ／2019）、「Energy:Sparks from the Collection」ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（ロンドン／2023）などのグループ展でも展示された。

ヨガナンタンは、エマージング・フォトグラファー・オブ・ザ・イヤーとしてICPインフィニティ・アワードを受賞（2017年）するなど、いくつかの賞を受賞している。2019年と2021年には、写真集『Dandaka』と『Amma』がそれぞれアルル国際写真フェスティバル・フォトテキストブック・アワード、パリフォト・アパチャーファウンデーション・フォトブック・アワードの審査員特別賞を受賞した。2022年には、エルメス財団がアンリ・カルティエ＝ブレッソン財団（パリ）およびICP（ニューヨーク）と提携し、フランスとアメリカで交互に行われる滞在制作プログラム「Immersion」に参加するなど、近年その活躍の場をさらに広げている。

〈作家の言葉〉
「A Myth of Two Souls」で東川賞海外作家賞を受賞し、光栄です。このプロジェクトは、2019年に世界のどこよりも早く東京で展示されたことで、すでに日本と強いきずなで結ばれています。そして今、このプロジェクトが北海道の新たな観客に届くことは私にとって誇りであり、うれしく思います。

▲「二つの魂の神話」より
Longing For Love
Danushkodi, India, 2018

▲「二つの魂の神話」より
Disappearance
Trivandrum, India, 2013

【第40回写真の町東川賞審査会委員】
（敬称略／五十音順）

北野 謙
（写真家）

神山 亮子
（学芸員･戦後日本美術史研究）

上野 修
（写真評論家）

安珠
（写真家）

原 耕一
（デザイナー）

丹羽 晴美
（学芸員･写真論）

柴崎 友香
（小説家）

小原 真史
（キュレーター･東京工芸大学准教授）